

# 病院の外来化学療法カンファレンスに参加、 情報共有に基づき薬剤提案

薬と日常生活を結び付けた患者情報を薬局で聞き取り、  
病院サイドに提供

埼玉県行田市にあるアイン薬局行田店の薬剤師、白戸達介氏は毎週、近隣の病院で開かれている外来化学療法カンファレンスに参加しています。処方せんでは得られない情報をカンファレンスで入手する一方、逆に、薬局の服薬指導などで得られた情報を、病院サイドに提供しています。情報共有することで、患者さまに生じている有害事象を早期に発見、薬剤提案などに結び付けています。



株式会社アインファーマシーズ  
アイン薬局 行田店  
(埼玉県行田市)

## 白戸 達介氏

### Profile

東京薬科大学卒  
大学卒業後、大型総合病院の門前薬局に就職。院内の外来化学療法カンファレンスにも参加し、多職種連携でがん患者のサポートを行う。

### ケモカンファでは毎回10~15人の患者情報を共有

—主に、どちらの医療機関の処方せんを応需されていますか。

白戸 多くが、門前の医療機関とその附属クリニックの処方せんです。その病院は、県からがん診療指定病院に指定されており、近年、がん治療にとっても積極的に取り組んでおられます。患者さまの中には、片道2時間ほど掛けて、わざわざ東京から通院される方もいらっしゃるほどです。

—白戸さんは、同病院で開かれている外来化学療法患者(ケモ患者)を対象にしたカンファレンス、いわゆる「ケモカンファ」に参加されているとお聞きしています。

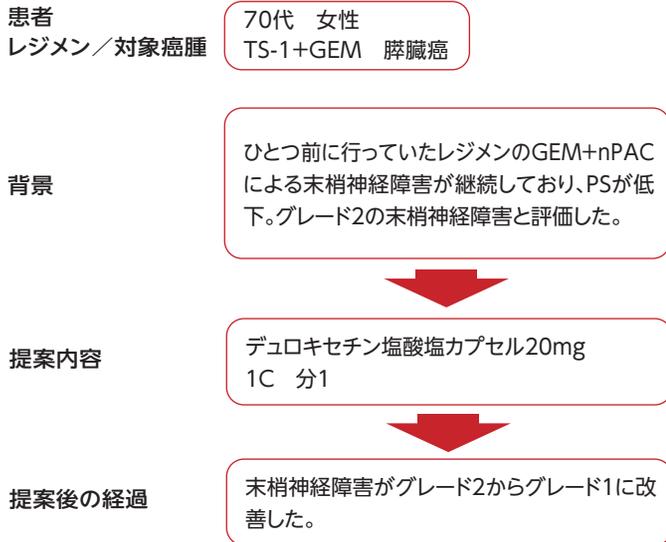
白戸 私は4年前に入社し、行田店へ配属されました。ただ、実際に配属されるまで、行田店でこうした取り組みを行っていることは知りませんでした。そもそもケモカンファへの参加は、病院からの声掛けによって、7~8年前に始まったようです。今まで先輩薬剤師たちが参加をされていましたが、私自身大学時代から、がん治療に関心を持っていましたので、配属後、半年くらい経ってから、私も参加させていただくようになりました。病院として、保険薬局との連携を積極的に進めようという意向もあり、ケモカンファ以外に薬剤部カンファレンスも開催されています。

ケモカンファは毎週水曜日の午後1時45分から1時間半程度、開かれています。参加するのは医師、病院薬剤師、臨床検査技師、緩和医療担当の看護師などです。それに薬局薬剤師として、私がかかわっています。通常、10人から15人程度の外来患者さまの情報を共有しています。

—病院としては、どのような役割を薬局薬剤師に期待しているのでしょうか。

白戸 当初は有害事象のグレードを下げるための役割を、薬局には期待し

介入事例 1



てはいなかったと聞いています。例えば、化学療法を受けた際に欠かせない制吐剤の処方漏れや、次回から減量の必要があるにもかかわらず減量がなされていないなどのチェック機能を、薬局に求めていたようです。それが時間経過とともに変化し、現在のような情報共有による有害事象の発見などの役割も、薬局に期待してくださるようになりました。

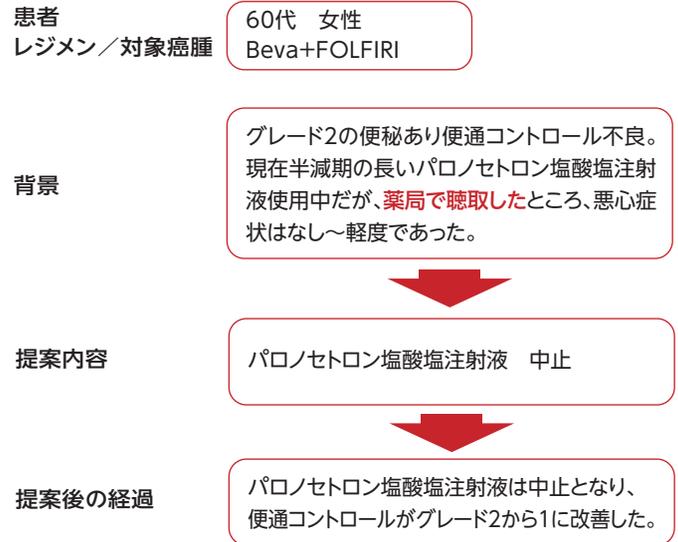
——薬局薬剤師として、ケモカンファでは、どのような情報を病院に提供されているのですか。

白戸 薬局で、薬と日常生活を結び付けた情報を聞き取り、それを提供するようにしています。薬の使い方を間違っていて理解していたり、実は有害事象だったにもかかわらず、患者さまが有害事象と気付かず、医師に伝えていなかったというケースは、まれなことではありません。あるいは、患者さまが医師に十分に伝えきれていない情報も意外とありますので、些細な体調変化の情報などもなるべく聞き取るようにしています。ケモカンファに参加しはじめた当初は、どのような情報を病院サイドが求めているのかわかりませんでしたが、有害事象やその他の症状の話をししたら、「薬局はそんな情報まで持っているんだ」と喜んでくださったので、それ以降は、薬と日常生活に関連した情報をヒアリングするようにしました。

病院・薬局の連携を患者さまに伝え  
安心感を提供

——今年、白戸さんは日本臨床腫瘍薬学会学術大会で、

介入事例 2



ケモカンファ参加の取り組みについて発表されました。簡単にご説明ください。

白戸 「外来化学療法カンファレンスへの薬局薬剤師の参加が高度薬学管理機能の発揮に及ぼす影響」と題してポスター発表をしました。2017年9月から2018年10月の間のプレアポイド事例から、薬剤師の介入によって有害事象共通用語規準(CTCAE)のグレードが改善した事例を収集し、分析しています。調査対象はケモカンファで情報共有した患者さまで、21件の改善事例が確認できました。そのうち8件でCTCAEのグレードが改善しました。8件の中でも特に印象に残っているのは、多汗症グレード2からグレード0に改善した患者さまです。この患者さまの場合、点滴が終わって病院で会計をしている最中に汗だくになってしまい、来局する頃には顔が真っ赤になり、首にタオルを巻かないと服が濡れてしまうほどの汗でした。この発汗は、イリノテカンによるコリン刺激が原因と考えられましたので、今回のケモカンファで抗コリン薬を提案し、実際に処方されました。その患者さまがその後、来局された時は全く汗をかかなくなりましたし、「ピッタリ汗が止まった」と感謝してくださいました。

この患者さまの場合、病院からの情報が得られていたからこそ、イリノテカンによるコリン刺激が原因ではないかと推定できましたが、こうした大量の汗をかく患者さまは、おそらく他の薬局でもおられると思います。汗をかいて気持ち悪そうにしている患者さまに対して、薬局薬剤師が違和感を感じたとしても、病院からの情報がいないために、病院にフィードバックできないことがあると思います。当薬局では、服薬指

導などで患者さまから得られた情報をケモカンファで共有しているため、この患者さまのように処方提案することができました。その結果、安全かつ効果的な外来化学療法の実現に貢献できたと受け止めています

——ケモカンファに関する勉強会を、薬局で開かれたそうですね。

白戸 はい。2018年9月に局内勉強会を開催しました。この勉強会についてもポスター発表したのですが、当薬局の11人の薬剤師が参加しています。勉強会は、各種レジメンの特徴的有害事象やCTCAEに基づくグレード評価方法、薬剤提案の具体例などの内容でした。開催前後に参加者にアンケートを取り、勉強会の前後で参加者の意識がどのように変化するかを調べました。アンケートは抗がん剤投薬への不安や、ケモ患者への聞き取りの不安など4項目です。その結果、医療機関との連携の重要性は認識しているものの、ケモ患者への聞き取りに不安を感じていることが分かりました。しかし、勉強会後にはその不安が有意に下がりましたので、定期的に勉強会を開催し情報を共有することが、ケモカンファ参加への意識付けに繋がることが示唆されました。そのアンケート結果に基づいて、勉強会はその後にも継続しているのですが、今後、病院サイドと連携した勉強会が開催できないかなど、検討していきたいと考えています。

——ケモカンファに参加されている意義を、どのように受け止めておられますか。

白戸 病院の医師や看護師など様々な職種の方と人間関係を作れたことです。一緒に飲みに行く機会も生まれ、そこで今後の新しい取り組みを気軽に話し合えるようになったり、病院のスタッフの方々との距離を縮めることができたことが、私にとっては大きな収穫でした。一方、患者サービスに関して言えば、患者さまに安心を提供できるようになったことに、私としては大きな意味を見出しています。病院で行われているケモカンファに、私が参加していることを患者さまにお伝えすると、皆さん、とても喜ばれます。「病院だけでなく薬局も自分をフォローしてくれているんだ」と安心されるのです。そこに私は、大きな喜びを感じています。また、ケモカンファに参加することでカルテ情報や、病院で患者さまが話していた内容など、処方せんで得られない情報が得られるようになりました。そうした情報を基に新たなサポートを考えられるようになりましたので、そこにも意義があると考えています。例えば、食が進まない患者さまの情報がケモカンファで得られれば、その患者さまの食べられそうなレシピを探して、差し上げたりしています。

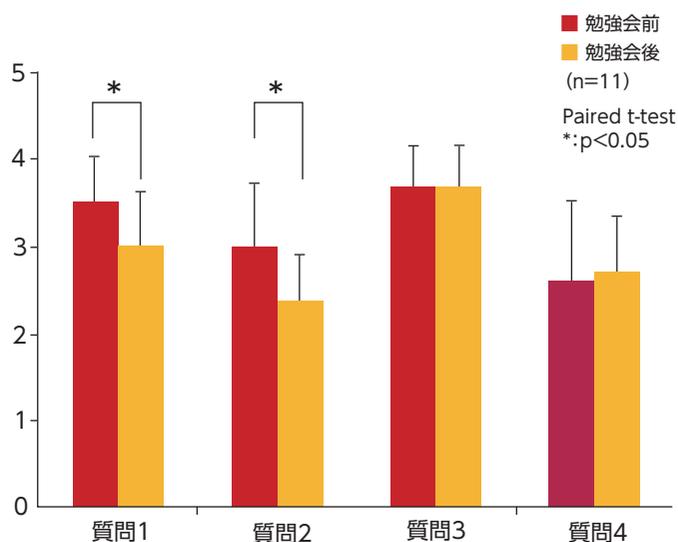
## 「ケモカンファに参加する薬局を増やしたい」

——貴社の薬局の中で、病院のカンファレンスに参加している店舗は、他にもあるのですか。

白戸 そう多くはありませんが、徐々に現れています。先ほどお話ししました学会発表は、社内でも表彰を受け、その内容がグループウェアに掲載されています。実は先日突然、グループ内の関西のあるブロック長から連絡が入りました。私の発表内容をある病院の薬剤部長にお話ししたところ評価して下さったらしく、その門前にあるアイン薬局でも、ケモカンファへの参加が決まったという話でした。このように、今後、もっと多くの薬局が病院のケモカンファに参加するようになってほしいと願っています。そのため、前回の発表ではケモカンファ参加の有用性をお伝えしましたので、今後の学会では、ケモカンファ参加を横展開するための、具体的な手法の提案など、方法論を発表したいと思っています。そして、これからも医療機関との連携を強化することで、高度薬学的管理機能を発揮し、安全かつ効果的な外来化学療法の実現に貢献していきたいです。

## 勉強会実施による局員の意識変化

- ・ 薬局薬剤師の「抗がん剤投薬への不安」と「ケモカンファに向けた患者 聞き取りへの不安」は勉強会前(3.5±0.52、3.0±0.77)よりも勉強会後(3.0±0.63、2.4±0.50)の方が有意に下がった。
- ・ 「医療機関と薬局の連携の必要性」は前後に有意差がなく、ともに高値であった(3.7±0.47、3.7±0.47)。



質問1) 抗がん剤投薬への不安 質問2) ケモ患者への聞き取りへの不安  
質問3) 医療機関と薬局の連携の必要性 質問4) 服薬情報提供書提出への不安